答　辞

春風にのってほのかに桜の香りが漂い、暖かな日差しに春を感じる頃となりました。

本日は、学長先生をはじめとする諸先生方のご尽力により、このような式を挙行していただけたことを修了生一同、心より御礼申し上げます。また、修了にあたり、心温まるお言葉を賜りましたことに重ねて御礼申し上げます。

この助産学専攻科に入学して一年。たった一年間ですが、振り返ると今までの人生の中で最も濃く、充実したものであったと感じています。

ここにいる助産学生のメンバーと出会った四月。スケジュールの忙しさに驚きながらも、助産について学べることを、とても嬉しく感じたことを今でも覚えています。一方で、初めての技術演習中、基本ができていないことを指摘され、このまま助産師になれるのかと戦慄したこともありました。この時から、皆で協力し励まし合い、出身も境遇も様々だったメンバーの団結力がだんだんと高まっていたと思います。
五月・六月では、分娩介助の練習も始まりました。本格的に手技を学べることへのワクワクした気持ちと同時に、思い通りにいかない悔しい思いを強く感じることもありました。しかし、放課後の限られた時間にメンバーと練習を重ね、エールを送り合い、何度も壁を乗り越えてきました。そして、自分自身の課題を見つけ、単なる手技だけでなく状況に応じた声掛けの大切さを学ぶことができたと感じています。
七月には、高校生に対する性教育の出前授業にも赴きました。メンバーと日々試行錯誤しながら助産師の視点で性教育を考え、ライフステージに応じた活動について実践を通じて学ぶことができました。

そして、九月から十一月にかけては実習が行われました。実習では、命が生まれることの喜びや妊娠・出産を乗り越える母子の力、支えるご家族の力を間近で感じることができ、それと同時に、助産師に求められる冷静な状況判断能力や責任の重さを痛感しました。分娩介助を重ねるごとに自分の知識や技術、関わりの未熟さが浮き彫りになり、なかなか眠れない夜もありました。それでも、出産に臨む母子に対して、私たちにできることは何かを考え、毎日を全力で取り組むことができたのは、受け持たせてくださった方の笑顔や言葉、共に過ごしてきたメンバーが真摯に頑張る姿、助産師という専門職の面白さ・やりがいを実感することができたためだと感じています。

病棟スタッフの皆様には、私たちが一つでも多くの経験が積めるようにと様々な場や機会を提供していただき、全員が十例の分娩介助を実施することができました。スタッフの皆様の女性や母子、ご家族に対する関わりを間近で見ることによって、私たちの助産師像はさらに広がり、新たな課題や目標を見つけることができました。三か月間、丁寧に、かつ熱心にご指導してくださったこと、心から感謝申し上げます。

助産学専攻科の先生方。「助産師になりたい」という夢を叶えるため集まった私たちを、時に厳しく、時に寄り添い、今日まで導いてくださり、本当にありがとうございました。色々とご心配やご迷惑をおかけすることもありましたが、先生方の生徒としてこの一年間学ぶことができて本当に良かったと思っています。

そして、どんなときでも応援してくれた家族。看護大学を卒業した後、看護師として働き続けることも一つの道でした。ですが、助産師として働くために、さらに一年学ぶことを理解して、ずっと支えてくれて、本当にありがとう。

最後に、助産師になるという目標を持ち、多くの時間を共有してきた仲間たち。ここまで来れたのは、他でもないみんなで協力し合い励まし合い、毎日を乗り越えることができたからです。みんなと出会うことができて本当に良かった。ありがとう。これから、どんな壁に直面し、どんな助産師になるのかはまだ分かりませんが、一年間どんなことにも諦めず最後までやり遂げてきた私たちなら乗り越えられると信じています。また、必ず会いましょう。

この一年間で学んだこと、感じた喜びや嬉しさ、悔しさは、この先助産師として働く上で忘れてはならないものだと確信しています。すべての女性、新生児や乳児、家族に対して真摯に向き合い、助産師として何ができるかをこれからも考え続けていきたいと思います。

最後になりましたが、本日ご臨席の皆様のご健勝とご多幸、佐久大学のさらなる発展を心より祈念し、答辞とさせていただきます。

令和６年　３月 15 日
　佐久大学　助産学専攻科
　第２回修了生代表

坂口　菜々美